

13 (水)

キリストの涙の祈り

へブライ人への手紙第五章 10節

キリストは、人として生きておられたとき、深く嘆き、涙を流しながら、自分を死から救うことのできる方に、祈りと願いとを献げ、……。(7)

大祭司なるイエスは、何よりも神に祈ることをとおして、大祭司としての務めを果たされました。ここでは、「深く嘆き、涙を流しながら、……祈りと願いとを献げ」ていたということです。神の御子が深く嘆き、涙を流しながら祈られたのは、神に背いて生きる人間の罪の大きさとその悲惨さを誰よりも良く知っておられたからです。私たちは自分の罪にあまりにも鈍感なため、嘆きも涙もない祈りを献げて平気でいられるのです。その私たちのために、大祭司なるイエスは十字架上で命をかけて、執り成しの祈りを献げてくださいました。その激しい切なる祈りがあったからこそ、私たちのような者が尊い救いの恵みにあずかったのです。この方は、今も私たちの大祭司でいてくださいます。私たちのために涙を流して執り成してくださる主イエスに、今日も寄り頼もうではありませんか。